

BUSINESS

リーダーになる!

実践する上司学。
よきリーダーに、よき上司になるために。



嶋津良智 ■リーダーズアカデミー学長。早稲田大学講師。大学卒業後、IT系ベンチャー企業に入社、トップセールスマンとなり、24歳で最年少営業部長に就任。1993年に独立、起業。94年に共同で情報通信機器販売の新社を設立。2004年にIPOを果たす。05年に教育機関、「リーダーズアカデミー」を設立。

第7回 汚れ役を買って出る!

『あたりまえだけどなかなかできない 上司のルール』で少し触れていますが、部下に嫌われても、やり抜かなければならないことが上司にはあります。

水泳指導者の平井伯昌さんの著書『見抜く力ー夢を叶えるコーチング』の中に、中学3年生の時の北島康介選手に関するエピソードがあります。当時の北島選手は、ジュニアオリンピックで中学記録が期待され、周囲が騒ぎ始めていたそう。ですがストリートにオリンピックを目指している時期で、チャホヤされたり、中学記録ぐらいで浮かれていた暇はないと考えた平井さんは、本人には悪

いと思いつながらも試合前の練習でわざと負担を掛け、調子を狂わせたそうです。結果、北島選手は試合にも負けてしまいました。平井さんは、「このとき中学記録を獲らしていたら、おそらく『心・技・体のパランス』は狂ってしまっただろう。わたしたちは、もっと遠くを見詰めているんだ、という気持ちがあった」と著書の中で語っています。ここから学ぶことは、「相手のことを本気で考えるこ

と、「ゴールを目指して目先にとらわれなかった勇氣」、「自分の考えに対する信念、コーチに対する信頼」です。上司と部下との関係のイロハの詰まった話だったので紹介しました。

わたしはある三つのことを捨てたとき、部下とのコミュニケーションが大きく変わり、非常に良好になりました。さらに汚れ役を演じることも苦にならなくなりました。

一つ目は、「人に好かれた」という気持ちを捨てる。言い換えれば、相手を信頼することです。人に嫌われない、好かれたという気持ちは誰もが持っています。しかし、この気持ちを

持っているうちは、たとえ正しくてもネガティブなことを相手に伝えるときにためらいが生じます。この裏側には「相手への信頼の欠如」があります。本当に相手を信頼していれば、どんなに厳しいことでも「正しいことであれば分かってくる」という信念のもとに伝えられるはず。二つ目は、「他責を捨てる」。要はすべて自分の責任だと思える。「自己責任」というマインドを持つことです。人はつい自分以外のせいにして自己防衛をします。自著「だから、部下がついてこない!」にも書いた、「電車の車両故障で会社に遅刻した場合、誰の責任

か」という例をわたしはよく出します。確かに遅刻をした「原因」は故障です。しかし、遅刻をした「責任」は、いつも乗る電車が遅れないと勝手に決めて乗車した自分にあるのです。どんなことがあるうが、自分の発言や行動には全責任を持って取り組むことを心掛けてください。

三つ目は「勝手な思い込みを捨てる」です。これは「相手がどう思うか」と考える癖を捨てること。自分が正しいと思つてやること(言うこと)をどう考えるかは、相手の問題であり、あなたの問題ではありません。ところが、人は相手がどう思うか、どう考えるか、また傷付かないだろうかと、相手に決定権があることを、自分に決定権があるかのごとく考える癖があります。ぜひ、「三つの悪い思考の癖を捨て、部下との最高の関係を築いてください。」(記事協力・Angin)